

言語教育における異文化コミュニケーションの方法

— 国語教育と日本語教育を連携する試み —

林 圭 介 (法政大学中学校・高等学校)

1. 序論

本研究のねらいは、異なる文化をつなぐコミュニケーションの方法とその可能性を言語教育の場で探究することである。この試みによって、学習者は日本の社会だけでなく、日本の外の社会における言語と文化の複雑な関係の網の目を自覚できるようになる。それは、学習者の用いる日本語が教室の外にも開かれるコミュニケーションを志向するようになるということだ。

先行研究を確認すれば、「母語の主体化」という観点から「第一・第二言語教育の区別を超えて、表現のための教育という幅広い方法論」を提起する牲川波都季・細川英雄の実践研究がある(2004: 42)。牲川・細川は、国語の授業でこれまで日本語教育で行われてきた「学習者の思考の表現化」を組み込む実践を行った(2004: 31)。それは、自分でテーマを選び、他者とのインターアクションを通じて、他者を説得する論理を持つレポートを書き、さらに、学習者間で相互評価を行うことである。この一連の活動から学習者は「自分にとって興味・関心のある対象と自分との関係を語ること」ができるようになり(2004: 34)、それを「他者のことばを語り直すための「わたし」のことば」と意味づけている(2004: 245)。

牲川・細川で試みられているのはレポートの作成と相互評価であるが、本研究では異なる言語や文化が交錯するテキストを対象として、そのテキストを読み、訳し、書くことを通じて、日本語が教室の外に向けて開かれる表現となる活動を提起したい。それは、学習者の表現を教室の外にある社会に向けて発信する表現として位置づけ直す試みと意味づけることができるだろう。

2. 研究対象と方法

勤務校は大学付属の中高一貫校で、高2・高3を対象に必修授業の他に選択授業を設けている。本研究で提起する言語教育の方法は、この選択授業の一つである言語表現法ゼミで行った1年間の活動をまとめたものである。

ゼミの学習目標は「「日本語教育」と「翻訳」を切り口に、様々な言語で表現された作品を読み、書く方法を身につけること」である。各学期で取り組んだのは、日本語教科書の分析、絵本の翻訳、日本語学習者とのブログ活動である。いずれも異なる言語で書かれたテキストから学習者が自身の表現を身につけていく点で結びつく。それぞれの活動における高校生による表現の発見から、言語教育における異文化コミュニケーションの方法を提起したい。

2-1. 日本語教科書の分析(1学期)

教材として扱ったのは、*Nakama 1*である。吉岡編(2008: 196-197)によれば、この「テキストの特徴は実用的なレベルの日本文化を英文で説明することによって、日本文化を理解させコミュニケーション能力の育成を図ろうとしているところ」にある。英語圏の日本語学習者にとっては日本語や日本文化を使用言語である英語で学ぶ利点がある。この点を活用し、日本の高校生が日本語や日本文化が英語でどのように教科書で記述されているかを学ぶ手だてとした⁽¹⁾。

高校生が着目したのは、日本語教科書で示された次のような会話の例文である。

- アリス：①あのう、がくせい かいかんは
どの たてものですか。
—みちこ：その しろいのですよ。

ーアリス：②ああ、そうですか。あまり おおきく ありませんね。

ーみちこ：ええ。

ーアリス：じゃあ、どれが けいざいがくぶの たてものですか。

ーみちこ：ここですよ。

ーアリス：ここですか。③あのう、じむしつはどこですか。

ーみちこ：みぎがわに ちゃいろい ドアがありますね。

ーアリス：ええ。

ーみちこ：あそこですよ。

ーアリス：④ああ、そうですか。(Nakama 1998: 103-104. 傍線部は引用者。以下同様。)

教科書の例文は、留学生が日本の大学生に尋ねる対話の仕方を学ぶために示されたものである。傍線部で示したように、「あのう」や「ああ」という発話が学生同士の接触場面で多用されている。しかし、日本語で「自然」な会話となるように教科書で示された発話が「不自然」だと指摘したのは高校生である。それは、①や③で「あのう」とアリスが場所を聞いているにもかかわらず、②や④で「ああ、そうですか」と自分でそっけなく答えているためである。「自然」な会話を身につけるために示された教科書の例文がいかにも「不自然」に見えたのだ。

しかし、この「不自然」な例文こそが国語教科書と日本語教科書の違いでもある点に高校生は気づいていく。たとえば、1学期の授業の最後にアンケートを採った際、高校生は「なかま」では人とコミュニケーションをとることに重点をおいて、普段自分たちが使っている教科書では人の意見を聞き入れたり、それに対してどのような自分の意見があるのかということに大事にしているんだと思う」と意見を寄せている。国語教科書では「人の意見」を聴き、「自分の意見」を伝えることを重視しているのに対し、日本語教科書では「人とコミュニケーションをとることに重点をおいているというのだ。つまり、くり返しある一定のフレーズを反復練習することで、学習言語を使えるようにしていく外国語教育の方法に気づくようになったのである。それは言語教育の場で教科書を批判的に読む意義を学習者が学ぶレッスンと意味づけることができる⁽¹⁾。

2-2. 絵本の翻訳(2学期)

絵本の翻訳で取り組んだのは、Natasha Mac a'Bhaird の *Olanna's Big Day* である。このテキストは、2012年度、神戸女学院大学が高校生を対象に実施した絵本翻訳コンクールで用いられた作品である⁽²⁾。事前の指導ではコンクールの概要を説明し、夏休み中に個別でメールのやり取りを行い、9月初旬に課題を投稿した。投稿後、3~4名のグループで作品の舞台となったアイルランドの文化的背景を調べ、すでに投稿した課題の訳し直しに取り組んだ。その訳し直しを翻訳者の道田豪氏に読んでもらい、コメントをいただいた後、道田氏に手紙を認めるという手順で進めた。

物語のあらすじから確認しよう。主人公は、ナイジェリア出身の黒人の女の子オランナである。オランナはアイルランドの祝祭であるパトリック・デイのパレードに楽隊のメンバーとして参加した。しかし、パレードが始まる直前に、仲間のドラムの紐が切れてしまう。オランナは祖母からもらったスカーフを代わりに使い、このハプニングを解決する。見事、パレードは成功し、オランナは祖母のスカーフがパレードを救ったと早く伝えたい、というのが物語の流れである。

高校生が調べたのは、絵本に描かれたアイルランドを示す表現である。たとえば、"Saint Patrick's Day"や"Tin whistle"、"Leprechaun"である。"Saint Patrick's Day"は聖パトリックの命日である3月17日を記念したアイルランドの祝日で、緑の服にシャムロックの葉をつけてパレードをして祝う。パレードでは"Tin whistle"というアイルランド伝統のブリキで作られた笛を吹き、"Leprechaun"という小さな妖精が踊る。

絵本でもパレードの場面で、緑の衣装に身を包み、竹馬に乗った背高の男たちが歩き、同じ緑の服を着た妖精が地面を飛び回っている。また、緑の体の大きなドラゴンが空をうねっている。しかし、パレードが始まるちょうどその時に、ドラムの紐が切れてしまうのだ。この切れた紐の代わりに、オランナが身につけた緑と白のスカーフが楽隊を救う。オランナのスカーフは文化の混濁性を浮かび上がらせる仕掛けになっているのだ。それは、緑と白の組み合わせが、祖母の国、ナイジェリアの色を表すからであ

る。色彩豊かなパレードの場面が示すのは、にぎやかなアイルランドのパレードとアイルランドにおける多様な文化のあり方だ。文化的背景の調査と、絵本における物語の展開、そして、挿絵の色から高校生が見つけたのは、アイルランドにおける文化の混雑性である。

また、翻訳者の道田氏から教えられたのは翻訳を通じた文化の置き換え方である。日本語と英語では言葉が示すイメージに差異がある。たとえば、ドラムの紐を首からかけることを英語では"(she) helped put it over Tommy's head" (Mac a'Bhard 2009: 28) と表現する。日本語と異なり、英語では"head"が首も含めた頭部全体を指すのだ。道田氏によれば、"scarf"も同じである。日本語の表現では、スカーフと文字通り訳すのではなく、マフラーと置き換えることで、"scarf"がドラムを支える紐の役目を果たすことになるのだ。こうした訳の選択に必要なのは辞書を引くことだという。

「伝えるべきは「単語」ではなくて「意味」だ」という道田氏の言葉は、翻訳において辞書を読む意義をあらためて高校生に認識させた。道田氏への手紙の中で、高校生は「細部まできちんと検討し、文脈や、その文章の世界観に合うような訳を選ばなければ完成度の高い作品にはならない」と記している。翻訳を「作品」として完成させるためには「辞書を読むこと」と「意味を表現すること」の二つが密接に関わり合っている必要がある。言語教育における翻訳の効用について論じたガイ・クック (2012: 125) は、「翻訳は言語学習者に対して、初学言語との接触に関する独特の知見を与える術となりうる」と指摘する。クックが指摘する「独特の知見」とは、「文化と言語からなる大きな塊」、すなわち、ある言語圏における文化と言語の結びつきの特異性である。絵本の翻訳を通じて高校生が学んだのは、この特異性を表現する方法である。

2-3. 日本語学習者とのブログ活動 (3 学期)

ブログ活動で行ったのは、カナダのヒューロン大学で日本語を学ぶ大学生との交流である⁽³⁾。ナズアキン富美子 (2012: 92) は日本語教育におけるブログの意義を「学習者の学習過程、交流を記録できるという利点」にあると指摘している。この利点を

活かし、カナダの大学生にとっては教室で学んだ日本語で日本語使用者と触れる体験とし、日本の高校生にとってはカナダで日本語を学ぶ学習者と対話する体験とした。日本語教科書の進行と合わせて活動を行うため、ブログのテーマとして設けたのは、日本語教科書で取り上げられている「自己紹介」、「日本の年中行事」、「自分の好きなこと」とした。

双方の学習者の交流について「正月」をテーマにしたブログから確認したい。ある高校生は正月にちなんでブログで「おぞうに」について触れた。しかし、大学生にはこの「おぞうに」がわからなかった。そこで、ある大学生が、「I don't know what ozouni is」と質問を寄せ、この質問に対して「ozouni とは正月 (しょうがつ) にたべる、にほんりょうりです。すーぷのなかに餅 (もち) がはいています」と高校生が説明するというやりとりがあった。興味深いのは、別の大学生から同じ内容の質問がなされた次のような例である。

カナダの大学生: I wonder what is ^{マ マ} “おぞう”?

日本の高校生: “おぞうに”とはスープのなかに餅 (もち) がはいている、にほんりょうりです。これをたべると、からだがあたたまります。

高校生は「“おぞう”」という大学生の日本語の誤りを直すだけでなく、先の「おぞうに」の説明に加え、「これを食べると、からだがあたたまります」と説明を付け足している。さらに、これらの「おぞうに」に関するやりとりから、「最近たべて、おいしかったものはありますか?」と問いかけ、「正月」と「おぞうに」から「おいしかったもの」へと話題を展開している。この展開から見えてくるのは、高校生が英単語も織り交ぜながらコメントし、似たような質問にも言葉を付け加えながら説明していく変化である。

ブログ活動を通じて高校生が見出したのは、ブログとコメントの双方に工夫を加えることである。たとえば、日本語初級者とのやりとりではブログの文章の情報量が少なくなりやすいことがあった。情報量の少なさが利点として働く場合もあるが、ブログの文章と呼応して「ワンパターンなコメントになりやすいので、ワンパターンにならないよう工夫する」必要が指摘された。工夫として挙げられたのは「ニ

ューズなどのオンタイムの情報を共有する」ことや「日本語と英語の両方で書く」ことである。また、ブログ自体にも「写真」をつけ、「それぞれの文化について、それぞれの視点で書き、「話に広がりがないため、自分の情報も詳しく書く」ようにする点が挙げられた。さらに、「ブログでは好きなことを共有する者同士が情報を交換することが多いが、このプロジェクトでは知らない者同士がお互いを知り合うことを目標としているため、ブログ活動自体について意見を交換するとよいのではないか」という意見も出された。

ブログ活動の展開と高校生の意見から見えてくるのは、教室で行うブログが通常のブログとは異なることである。それは、このブログ活動で日本語の正しい使い方が教えられているからではない。ブログ活動を通じて日本の高校生とカナダの大学生が互いに意見を交わし合う場を意識するようになるからである。その意味で、ブログ活動は、異なる言語と文化の壁をそれぞれの表現から意味づけ直す試みと意味づけることができる。

3. 結論

3つの活動を通じて高校生が身につけたのは、日本語を国語の外へつなげる道具として捉える視座である。日本語教科書の分析では教科書の批判的読解を通じた外国語教育の目的を、絵本の翻訳では異言語間における表現の差異を、日本語学習者とのブログ活動では異なる学習者間におけるコミュニケーションの方法を見出すことができた。

翻訳研究者のアンソニー・ピム (2002: 7) は、"national cultures" (国民文化) と "intercultures" (異文化) がそれぞれ "trust" (信頼) と "calculation" (推測) から形作られているとし、翻訳者の役割が無前提の信頼ではなく、理由づけによる推測によって他者とのコミュニケーションを構築する点にあると指摘した。異文化を媒介する担い手として学習者を捉えたとき、この翻訳者の位置づけは言語教育においてもきわめて大きな意義をもたらす。推測によって構築していく他者とのコミュニケーションは、国民文化の中ではなく、異文化の間で学習者を育むレッスンとなるからである。

言語教育における異文化コミュニケーションの方法が提起するのは、異なる言語と文化が重なり合う場所を学習者が自身の表現を通じて学ぶ体験である。本研究で述べた3つの活動からさらに多様な教育活動を創出し、有機的なカリキュラムを構築することを今後の課題としたい。

- (1) 日本語教育においては日本語学習者による教科書の批判的読解を試みた熊谷由理の研究がある。熊谷 (2008: 146) の指摘する「批判的視野を持った言語使用者」という観点は、日本語使用者が自らの言語使用を捉え直す上でもきわめて有用である。
- (2) 神戸女学院大学による第3回絵本翻訳コンクールの詳細は、次の HP アドレスを参照されたい (<http://www.kobe-c.ac.jp/kikaku/img/2012pamphlet.pdf>, 2013年2月14日)。
- (3) 2009年度より白川理恵氏と協働で国語教育と日本語教育を連携する授業実践を行っている (林・白川 2012)。また、カナダの大学生と日本の高校生との英語学習の交流については佐藤・白川 (2012) に詳しい。

【参考文献】

- ガイ・クック (2012) 『英語教育と「訳」の効用』 斎藤兆史, 北和丈訳, 研究社
- 熊谷由理 (2008) 「日本語を学ぶ」ということ—日本語の教科書を批判的に読む」佐藤慎司, ドーア根理子編『文化、ことば、教育—日本語/日本の教育の「標準」を越えて』 明石書店, 130-150
- 佐藤幸恵, 白川理恵 (2011) 「ノンネイティブスピーカーの英語への気づき」『新英語教育』第509号, 10-12
- 牲川波都季, 細川英雄 (2004) 『わたしを語ることばを求めて表現することへの希望』三省堂
- ナズアキン富美子 (2011) 「ピアラーニングとアセスメント—ブログを用いたピアラーニング」佐藤慎司, 熊谷由理編『アセスメントと日本語教育—新しい評価の理論と実践』くろしお出版, 69-96
- 林圭介, 白川理恵 (2012) 「日本語教育と国語教育をむすぶ—高校生による日本語教科書の分析」日本語教育国際研究大会, 名古屋大学, 2012年8月19日
- 吉岡英幸編 (2008) 『徹底ガイド—日本語教材』凡人社
- Mac a' Bhaird, Natasha. (2009). *Olanna's Big Day*. Dublin: O'Brien Press.
- Pym, Anthony. (2002). *Intercultures and the Interface with Nationalist Culture*, 1-10. <http://usuaris.tinet.cat/apym/on-line/intercultures.html>, Accessed 14 February 2013.
- Makino, Seiichi., Hatasa Abe, Yukiko. and Hatasa, Kazumi. (1998) *Nakama 1: Japanese Communication, Culture, Context*. Boston: Houghton Mifflin.